

ベアトリクス・ポターの生涯 —自立への軌跡

眞 方 陽 子

Ⅰ) ベアトリクス・ポターの『日記』をめぐる

ベアトリクス・ポター（以下 BP。Beatrix Potter 1866.7.28-1943.12.22）には、77年間にわたる生涯の中の15才から30才の間の暗号による手書きの日記が残されている。14才の時のものもあったとされるが、後年読み直して削除したようである。20代前半の病気がちだった頃の日記は分量も少ないが、それ以外の時期のものは BP 自らが考案した暗号を用いてかなり細かく書かれている。この暗号の日記は、もしレズリー・リンダー（Leslie Linder 1904-1973.4）という稀有な人物によって解読されていなければ、恐らく永遠に謎のままであっただろう。元々エンジニアだった L. リンダーは、精巧な模型飛行機の組み立て、写真撮影、ピアノ演奏等に通じた多才多趣味の人であったが、人生の後半から死の直前まで、BP の最新の伝記作家ジュディ・テイラー（Judy Taylor）が語るように、「BP の生涯と作品の詳細を究めるといふ献身的な趣味」をもう一つの趣味として加えることになった¹。L. リンダーが BP の暗号を解読する過程はスリリングとしか言いようがないが、それは正に彼の BP に対する深い畏敬の念と探求への情熱の結晶だったと言えるだろう。

第二次世界大戦直後に L. リンダーは、半ば偶然ともいえる形で幼少時に親しんだ BP の作品に的をしぼって、物語と挿絵に夢中になっていく。どのようにしてこれらの作品は書かれたのか、言葉と絵とのこれ程見事な融合を成し遂げた作者とはどのような女性だったのか、彼の関心と好奇心は深まるばかりで

あった。

自分の仕事の現役時代には、いわば余暇を当てることで BP の探求は進められ、小型絵本の原画やヒルトップ農場やソーリー村を実際に見るため、L. リンダーは湖水地方へも出かけるようになる。他方で彼は、BP の挿絵の原画、デッサン、スケッチブックの蒐集と購入にも精を出し、将来は誰もが楽しめる本にまとめようとの計画も抱いていた²。

そうした過程で L. リンダーがヒルトップで、BP の暗号の日記——「不可思議な書類の束」と表現されている——に出会ったのは、1952年のことだった³。1953年になると、この奇妙な暗号文の一部を持ち出すことが許され、その解読に取り組むこととなる。けれども、1958年のイースター・マンデーになっても L. リンダーは解読の手掛かりがつかめず、暗号文の紙束は永久に謎のまま終わるのではないかと危ぶんでいた。ところが、偶々これが最後の試みとの思いで手にした紙束の中の一枚の、ある一行が糸口となり、同じ日の深夜には暗号文字が事実上解読されたのである。息づまるような解読の手順は、L. リンダーによる『BP の日記1881-1897』に記されているが⁴、この快挙が後世の我々に与えてくれた恩恵は計り知れない。というのも、15才から30才までの若い時代の日記であるにも拘わらず、後に開花する BP の才能の蓄は殆どすべて表れているといっても過言ではないからである。

以下の論考では、BP が精力的に取り組み成し遂げた三つの仕事——絵本作家、カントリー・ウーマン、ナショナルトラストへの貢献——に焦点を当ててみたい。ただし、ここで忘れてならないのは、20代から30代にかけての BP は、茸と化石に並々ならぬ関心を抱いており、とりわけ茸に関しては菌類学者になっていた可能性もある程熱心に研究を続けていた点である。これは、幼少時から毎夏スコットランドや湖水地方で数ヶ月を過ごす BP 一家の習慣とも深い関わりがある。

もともと絵を描いたり写生したりすることが大好きだった BP は、自然があふれる避暑地で、野生の草花、昆虫、小動物、さらには自分で集めた化石に至

るまで、せっせと観察しては写生を続けていた。スコットランド南部のコールドストリーム郊外「レンネル荘」に滞在していた1894年7～10月にかけては、茸と化石への言及が特にしばしば見られる。「レンネル荘」滞在最後の1894.10.10の『日記』には、夏の収穫として、念入りな40枚の茸の写生が出来たこと、珍しい化石も何個か集めたことを挙げている⁵。茸の研究は、後述するチャールズ・マッキントッシュとの交流を通じてロンドンに戻ってから精力的に続けられた。BPは、地衣類が茸と藻の共生（symbiosis）であることをつきとめ、さらに、カビの胞子の発生についても、顕微鏡による実験で研究を深め、新しい胞子の培養も試みて新説を打ち出していた。研究過程で生ずる専門的な疑問の解明と自分の新説への評価を切望する彼女に、父方の叔母の夫で、高名な化学者だったSir ヘンリー・ロスコー（Sir Henry Roscoe 1833-1915。『日記』では「ハリー叔父さん」と呼ばれている）は、ロンドンのキュー王立植物園（Kew Gardens）園長シズルトン＝ダイアー（W. T. Thiselton-Dyer）を紹介してくれた。入園の便を計ってもらい、他の専門家達も紹介されるが、園長や副園長ジョージ・マッシー（George Massee）達は、BPの研究をまじめに取り合ってくれず、女性だと見くびって失礼な態度を取る有様で、BPは『日記』の中で、彼等とのやりとりや男性達の言動を皮肉も交えた冷静な筆致で批評している。結局ハリー叔父さんは、BPの新説と発見を論文に書くように勧める。BPのペーパー「アガリキネアエの胞子の発生について——Miss ヘレン・B・ポター」はロンドンのリンネ学会に提出され、1897.4.1の総会で読み上げられたことが総会議事録に記されている。ただし、当時は学会の総会に女性の出席が認められていなかったため、G. マッシーによる代読だったと考えられている⁶。彼女の『日記』は菌類学者としての夢が無惨にも打ち碎かれる直前の1897.1.31（日）で終わっている⁷。

こうしてBPの茸への情熱は、研究者としての道を閉ざされたため、アマチュアの研究者に留まらざるを得なくなり、専門的に生物学、植物学、生理学、細菌学の疑問を解明したいと望んでいたBPには昇華されない茸への思いが沈

殷していたのではないかと推定される。30代半ばからの『ピーターラビット』に続く絵本作りは、満たされない葺研究への情熱が源だったのではないかと思われてならない。

Ⅱ) 絵本作家への道

BPを絵本作家として有名にした『ピーターラビット』がフレデリック・ウォーン社から出版されたのは1902年10月（BP36才）だったが、それ以前にもBPはペットの兎のベンジャミン等をモデルにして、クリスマスカードやグリーティングカードを多数デザインしていた。1890年には、ヒルデスハイマー&フォークナー社がクリスマス向けにデザインしたカードを買ってくれ、BPは£6の小切手を手にしている。BPの『日記』には、初めて自分の絵が売れて、第一にやったことはベンジャミンに麻の種を一カップ食べさせたことだったと書かれている⁸。又、1892年からドイツ系の美術出版社であるアーネスト・ニスター社に絵が売れていたが、1894年にはその前年エリック・ムア（Eric Moore、後述の元家庭教師アン・カーターの次男）に送った絵手紙のカエルの物語を活かしてやはりニスター社に売っている——ただしBPは、『ピーターラビット』の出版直後、この絵物語の原画と印刷用ブロックをニスター社から買い戻し、後に『ジェレミーフィッシャーどんのおはなし』に活用している。できるだけ有利な条件で絵を買おうとするニスター社を相手に、BPが断固とした態度で渡り合った手紙のやりとりが残されており、ここにも晩年に至るまで粘り強くしっかりした意志を持って生きたBPの萌芽がうかがわれて興味深い⁹。

30才に近づいた1895.12.14の『日記』には、旧約聖書やワーズワスを読むと慰められる、との記述に続けて「ますます、余り高尚でない事——お金を手にする喜び——に元気づけられていく…ある程度のお金を持つのは大事なことだ、本を買ったり、自立を期待したりするためにも——侘しいことかもしれないが」という記述が見られるようになる¹⁰。

BP にとっての「自立」がどのようなことを意味するのか知るために、ここから幼少時の家庭の様子を見ておこう。19世紀後半の英国で、アッパー・ミドル（中流の上）の家庭の子供として育った BP には、後に W. ヒーリスと結婚するまでの47年間、ロンドンのボルトン・ガーデンズ No. 2 という四階建ての屋敷の中の四階の子供部屋が、教室であり、遊び部屋であり、仕事部屋であった。当時娘は学校に行かないのが普通のことで、BP にも専属の乳母がつけられ、勉強は家庭教師に見てもらっていた。絵の先生もつけてもらっていたが、1883. 11. 24の『日記』では、「レッスン料が高すぎ、お金を捨てるようなもの、おまけに私に害を及ぼしているのではないだろうか」に続けて、教師である Mrs. A. のどういう点がどうして嫌いなのかを細かく述べ、「早く絵のレッスンが終わり、心の平和と安眠が欲しい」と書いている¹¹。

BP の周囲には遊び友達となる子供はおらず、乳母と一緒に愛犬を連れて近くのケンジングトン公園へ散歩に出かける毎日だったが、6才年下の弟パートラム (Bertram) だけは唯ひとり大切な友人だった。弟と一緒に共通の趣味である小動物（カエル、ヤマネ、トカゲ、コウモリ、イモリ、サンショウウオ、カメ等）を子供部屋で飼い、飼育ばかりでなく観察と記録も幼少時から熱心に続けていた。二人は父からも母からも絵の才能を受け継いでおり、ペットの動物に限らず、野の草花、風景、建物など何であれ観察しては描いていた。夜にはシェイクスピアの作品を次々と暗記することを続けている。

BP の父方の祖父エドモンド・ポター (Edmund Potter 1802-1883) は、ランカシャー地方出身で、キャラコのプリントで成功して有名となり、木綿捺染の工場経営で財を成した。織物デザイナーを養成するマンチェスター美術学校 (The Manchester School of Art) の校長もつとめ (1855-1858)、1861年にはカーライル市から自由党国会議員に選出されて、ロンドンに進出している。1866年の引退後彼は、ロンドンの北ハートフォードシャーに「カムフィールド・プレイス」(Camfield Place) という、著名な庭師の造った庭を備えた広大な屋敷を購入した。BP は「世界で一番好きな」この屋敷を幼少時からしばしば訪れ、

エドマンドの妻である大好きな祖母ジェッシー (Jessie Crompton, 1801-1891) が90才で亡くなるまで、強い絆で結ばれていた。1891年頃には、「カムフィールド・プレイスの思い出」という文も残している。

BPの父ルパート・ポター (Rupert Potter 1832-1914) は、家業に加わることなく、法曹の道を選び、修行時代を経て法廷弁護士 (barrister) になった。けれども彼は生涯殆どその仕事をすることなく、ロンドンで紳士 (gentleman) の生活を楽しみ、教養人との社交、絵の蒐集、劇場通い等趣味の世界で暮らしていた。BPの『日記』を見ると、かなり早い時期から展覧会や画廊へ連れていってもらっている場面が数多く見られる。そしてBPはその場合、鑑賞した画家の絵についての感想を克明に記している。

BPの父親が熱中した趣味で忘れてならないのは写真であろう。当時の写真機は重量があり扱い難かったようだが、運んでくれる使用人のいる家庭では、旅先でも撮影可能だった。家族・友人は恰好の被写体で、避暑地の風景も多数残されており、丁寧に整理された写真は、百年以上経った現在でも、大変貴重な資料となっている。写真の趣味は父親だけではなく、BP自身も夏の避暑地に滞在中はとりわけ熱心に写真を撮りに出かけている。

24才で31才のルパートと結婚したBPの母ヘレン (Helen Leech 1839-1932) も、ランカシャー地方の木綿商人として成功した資産家ジョン・リーチ (John Leech 1801-1861) の娘であった。二人は、最初の三年間はアパー・ハーレイ街に住み、BPが生まれる年にケンジングトンのボルトン・ガーデンズ No.2 という四階建の新築の家に移った。この大きな屋敷を維持するために、ヘレンは多数の使用人を雇った——料理、家事を分担する者たち、執事、御者、馬丁である。さらにBPが生まれると、スコットランド出身の乳母も加わった。BPは厳格に育てられたと言われることが多いが、当時の中流階級の家庭の両親は、ポター家も含め、それ程高圧的ではなかった、とJ. テイラーは述べている。実際、子供の養育には専ら乳母と家庭教師が当たり、母のヘレンが四階まで昇ってくることは稀だったので、子供部屋で行われていることを母親は殆ど

知らなかったようである¹²。成長するにつれ両親との接触も増えていったが、BP にとり母親はかなり怖い存在であるのに対し、父親には親しい感情を抱いていた。どちらかという父親っ子であった BP の精神的な母親役は、「カムフィールド・ブレイス」に住む、美しい祖母ジェッシーだったのかもしれない。

結婚後、地方からロンドンに出てきた母親のヘレンは、ロンドンの婦人達との社交の輪にとり残されることなく溶けこんでいき、水彩画を描く機会もなくなってしまった。それに替わって馬車で出かけて挨拶代わりに名刺を置いたり、ケンジングトンの婦人達とお茶を飲んだり、自宅でのディナー・パーティの支度を取りしきったり、多忙であった。

BP 一家の家族旅行は、毎年の大事な行事であり、とりわけ3ヶ月前後に及ぶ夏の避暑地滞在は BP にも大きな影響を与えた。1871年（BP 5才）から1881年（15才）まではスコットランドへ、1882（16才）から1891年（25才）までは湖水地方（Lake District）へ、1892（26才）から1894（28才）までは再びスコットランドへ出かけている。スコットランドでも湖水地方でも、BP は野生の動植物に夢中になり、森を探検し、兎を捕まえると馴らして描き、ロンドンへ連れ帰っている。死んだ場合は皮をはぎ、煮て骨を残し、骨格の研究をするという念の入れ方だった。

父親のルパートは、避暑地で屋敷を借り、しばしば知人や客人を招いては政治、宗教、絵画、文学を論じたので、BP にも大切な知人や友人と知り合う機会となった。

その一人がハードウィック・ローンズリー牧師（Hardwicke Rawnsley 1851-1920）だった。彼は大学で古典学と化学を専攻した詩人、アスリート、ボートの漕ぎ手、そして J. ラスキンの信奉者だった。ウィンダミアのレイ地区で聖職についている間に湖水地方の自然に魅了され、産業振興と観光事業の侵入から湖水地方を保護しなくてはならぬと心に決め、鉄道延長計画、古くからの歩道の閉鎖計画、丘陵地帯での新しい採石場開設計画、ウィンダミア一周バス道路計画、等に反対し、「湖水地方保全協会」という「ナショナル・トラスト」の

前身を立ち上げる準備をしていた。妻のイーデイス (Edith) も絵がうまかったので、BP の絵の才能にも関心を寄せていた。ハードウィック・ローンズリーは地質学や考古学にも詳しく、その両方に関心の深い BP は彼との会話を大いに楽しんだのである。

もう一人は、BP がスコットランドで友人となった地元の郵便配達人チャールズ・マッキントッシュ (Charles McIntosh 1839-1922) である。彼は長年の郵便配達の道すがら、配達区域の自然観察を重ね、特に菌類に関しては茸学者といわれる程博識で科学的観察方法を身につけていた。1892.10.29(土) の『日記』で BP は、約束通り家にやってきてくれた彼の風貌や内気な物腰に触れ、左指を失う事故の前には、すぐれたヴァイオリン弾きで、今でもチェロを奏し、聖歌隊の指導をしていることに言及している。BP は茸の絵を見せ、マッキントッシュから生物学的に正確な批評をしてもらえて大変満足し、「チャーリーは私と一時間半話していった。今日の話し合いは大成功だった」と言っている¹³。BP は植物学的に完璧に茸の細部を描かねばならないという彼の忠告を得て、茸の観察をせっせと行い、マッキントッシュと共同で「茸の図鑑」を作る夢も持っていたが、生前は実現しなかった。後にフィンドレイ (W. P. K. Findlay) が『道端と森の茸』(Wayside & Woodland Fungi) を出版し、BP の茸の絵が59枚使われたが、それは1967年のことだった。

BP が17才の時、ドイツ語の家庭教師としてアン・カーター (Ann Carter 1863-1950、1886年結婚してムア夫人に) がやってきた。彼女がついた教師の中で最も若い、3才年上のミス・カーターを、「この最後の家庭教師が一番好きだった。欠点はあるにしても、とても温厚で知的な女性だった」と記している¹⁴。結婚後次々と家族が増えていったアンの家を、BP はしばしば訪れた。かごにハツカネズミを入れて訪れては、客間で放して走り回らせたり、パーティ用のワンピースを小さい娘達に贈ったりしていたと、L. リンダーは記している¹⁵。

BP は1893.9.4に、5才のノエル・ムア (Noel Moore、元家庭教師ムア夫人

の長男)が病気になったことを知り、避暑先のスコットランド北部ダンケルドの「イーストウッド荘」から、子兎であるピーター達4匹の物語を絵手紙にして送った。兎は、長年のペットでBPには身近な動物であり、ベンジャミン・バウンサー、ピーター・ラビットなどと名付けられたモデルもいたのである。

数年後BPは、ノエル少年に送った絵手紙から小型本を作ろうと思い立ち、大切に手紙をとっておいた少年から借り、絵本として書き直した。それを知った一家の友人ローンズリー牧師は、BPを大いに励まし、出版社探しにも協力してくれた。1900年には少なくとも6社に出版の打診をしたが断られ、1901年BPは自費出版を決心する。親戚に予約を募り、絵は白黒の線画、口絵一枚のみカラー仕立てにして、1901年12月16日、250部を印刷、増刷を見込んで口絵だけは500枚用意しておいた。実際、1902年2月には200部増刷している。

この私家版が出来上がる直前に、以前この企画に難色を示していたフレデリック・ウォーン社が再検討し、絵をすべてカラーにするとの条件で出版したいと提案してきた¹⁶。本の値段を1シリングに抑え、本の形も同じで、カラーには新しく開発された写真製版を使い、版權も保証されるという条件で契約が成立し、1902年10月『ピーターラビットのおはなし』初版8000部が出版された。続けて同年12月、BPは『グロースターの仕立屋』を自費出版し、翌1903年にはF.ウォーン社からそれが商業出版されている。

F.ウォーン社と契約交渉を続ける手紙のやりとりの中で、1901.12.18にはBPが父親ルパートについて「父にはまだこの件につき何も話しておりませんが、契約の内容をはっきり説明した方がよいと思います。何せ、^{パリスター}弁護士でしたので、少々堅苦しいものですから」と述べている¹⁷。又、1902.5.22の手紙の追伸に、「もし父がどうしても私と一緒に出かけ契約書に目を通したいと申しましても、どうか父の事は余りにかけないで下さいますように…父が時折少々気難しいことは、前以て申し上げておいた方がよいように思いますので。勿論、絵本のことは私の好きなようにして構わないのです、36才も間近な人間なのですから。父は昔気質なのだと思いますが、時々とても骨が折れるのも事

実です」とBPが記していることをL. リンダーは紹介している¹⁸。

BPはF. ウォーン社と手紙のやりとりのほか、しばしば会社を訪ね、ウォーン家の家族とも親しくなっていた。F. ウォーン社の創設者フレデリック・ウォーンの4人の息子の内、長男は夭折していたため、残る3人が出版に携わっていた。BPの直接の交渉相手は末子ノーマン（Norman Warne）だったが、BPは未婚の姉ミリー（Milly, Amelia）とも親しくなっていて、ウォーン家の明るい雰囲気魅せられていった。

Ⅲ）ヒルトップ農場購入が意味すること

BPが39才を迎える1905年は、彼女にとり特別な年となる。『ピーターラビットのおはなし』は大変売れ行きがよく、BPはその印税と叔母の遺産分けとで、この年湖水地方エスウェイト湖畔のソーリー村に農場付き農家ヒルトップを購入した。そこに住んでいた農場管理者ジョン・キャンノン（John Cannon）と妻（と2人の子供）には、引き続きそこに住んで農場を管理してくれるよう依頼し、その後彼等のための部屋も増築した。『あひるのジマイマのおはなし』（1908）には、キャンノン夫人と子供達、さらにBPの愛犬ケップまでも描かれている。

この年の初夏、BPはノーマンから手紙によるプロポーズを受け、彼女は喜ぶが、両親、特に母親は、商いをする人が相手となることに猛反対だった。しかしながらBPの決意は固く、双方の肉親以外には当面秘密にするということとで一旦落ち着いた。

ところが8月末、ノーマンが急逝し、BPは悲しみのどん底に突き落とされる。ノーマンの死の原因は、悪性貧血とも白血病とも言われている。

40才を迎えたBPは、可能な限りヒルトップに出かけるようになる。ロンドンにおける両親との生活は依然続いていましたが、新しい人生へ踏み出し、田舎で自立した生活を送るための足がかりをヒルトップが与えてくれたことは間違いない。

BP はすでに30代の時、F. ウォーン社から『ピーターラビットのおはなし』(1902)、『リスのナトキンのおはなし』、『グロースターの仕立屋』(1903)、『ベンジャミンバニーのおはなし』(1905) などのよく知られた作品を出版しているが、40代になると絵本作家と農場経営という二足の草鞋を履くことになった。

BP は農場経営について、ローンズリー牧師の高地牧羊への信念に賛同していた。湖水地方土着のハードウィック種の羊は、高地草原に育ち、冬の寒さや食料不足に強く、自分の育った農場を忘れず、他に行っても元の牧場に戻るので、囲わずに管理でき、そのウールは防水性に富む。この種の羊を農夫（婦）は高地に呼び戻すべきで、高地の牧羊を諦めるならば土地の品質低下を招くことになり、景観も維持されなくなってしまうだろう——これがローンズリー氏の主張であった。将来を懸念した彼は、1899年「全英ハードウィック種綿羊協会」(Herdwick Sheepbreeders' Association) を設立しており、その4年前の1895年には、友人である Miss オクタヴィア・ヒル、Sir ロバート・ハンターと共に「ナショナル・トラスト」も立ち上げていた。BP の父は、「ナショナル・トラスト」の最初の終身会員になっている。

IV) カントリー・ウーマンとして生きる

BP は1909年（43才）ヒルトップのすぐ近くのカーズルコテッジを購入し、その後も積極的に農場、農地、農家の買い取りをすすめた。この時購入の世話をしたのが、ニアソーリーの北隣ホークスヘッド村の事務弁護士ウィリアム・ヒーリス（William Heelis 1871-1945）で、情報提供や契約手続等面倒を見てくれ、BP と親しくなっていた。ウィリーと呼ばれた彼は姉3人兄8人の末っ子で、やせ型長身のスポーツマンだった。BP46才の1912年には彼からプロポーズされ、BP には何の問題もなかったが、又しても両親（父80才、母73才）の同意が得られない。父は法廷弁護士（barrister）だったため、娘の相手が事務弁護士（solicitor）では格が合わない、というのも一つの理由だった。この時、

弟バートラムが伏せていた自分の結婚の事実を告げてBPを励ます側に立ち、遂に両親も同意せざるを得なかったと言われている。

こうして1913年10月、47才のBPはW. ヒーリスと結婚したが、その直前の1911年から1912年にかけて、BPはウィンダミア湖における水上飛行機（飛行艇）への抗議行動で超多忙な毎日を過ごしていた。騒音、湖の汚染に加え、荷馬車の馬が驚いて事故が多発、フェリー運航上にも障害が発生するため、反対運動は熱を帯びていくばかりだった。知名度の高いBPは、署名集め、出版社への働きかけに奔走し、遂に運動は成果をおさめた——飛行機工場も作らせず、1912年一杯で飛行艇もウィンダミアを去っていったのである。

BPが結婚した翌年、父親が82才で亡くなり、老母の世話と農場経営が、すべてBP一人の肩にかかるようになった。1914年から始まった第一次世界大戦は、農場経営にも様々な影響を及ぼすようになった。馬は徴用され、耕作人も召集されるため、農場の仕事がスムーズにいかないのである。

そんな最中、弟バートラムが46才で亡くなり、BPは寂しさを隠せなかった。BPも弟も動物を飼うのも絵を描くのも大好きで、長じてからはどちらも農場経営に携わって農夫（婦）となり、親の圧力にも共同して対抗してきた。「未だに弟が亡くなったという実感がわからない——あんな若さで、とてもよい農場を持っていたのに…」とBPはローンズリー牧師への手紙の中で、弟との絆を懐かしんだという¹⁹。

やっと戦争が終わり、翌1919年BPは80才の母親のために、運よく売りに出されていたウィンダミアの「リンデス・ハウ」(Liderth How)という屋敷を購入した。1870年代末に建てられた美しい破風造りのこの屋敷には、BPの結婚前に家族で夏を過ごした思い出もあり、湖の眺めも見事であった。けれどもBPにとり何より有り難かったのは、母の屋敷がBPの住まいのあるソーリー村とは湖をはさんだ対岸に位置し、日々母親にわずらわされる事がない点であった。BPはメイドを4人、庭師を2人、御者（運転手）を1人雇って共に住ませ、家具のいくつかもロンドンの家から運ばせた。この屋敷で、母親は1932

年93才で亡くなった²⁰。

母をウィンダミアに住ませたことで、BPはロンドンからウィンダミアへと生活の拠点を移し、ソーリー村に活動の根を下ろしていった。BPもウィリーも地域の活動には積極的で、村の祝い事には喜んで協力し、クリスマスやイースターの行事にも快く応対した。

1919年、ソーリー、レイ、ホークスヘッドの教区に地区の看護婦を派遣して、近隣の医者不足や急病人の発生に備える制度（Nursing Trust）を設立することになった時も、BPは基金を寄付したり持ち家を提供したりして看護婦を常勤させることに協力している。この制度は、1946年に国民健康保険制度（National Health Service）に引き継がれることになる。

弟の死から2年後、若い頃からの知人で、父親とも親しかったローンズリー牧師が69才で亡くなった。彼は、自然保護や田舎の人々の伝統と技術を残す必要性を教えてくれ、ハードウィック種による高地牧羊の大切さを力説した人である。さらに『ピーターラビット』の絵本を出版するように勧めてくれ、出版社探しにも協力してくれた友人だった。

V) ナショナル・トラストへの貢献

第一次世界大戦が終わると、湖水地方では農地や土地を手放す人が増えだし、この地方の伝統的な生活様式を保存するためには、自分で土地を購入し、管理する以外に方法がないとBPは考えていた。1924年には、ウィンダミア湖東側の広大なトラウトベック・パーク農場（Troutbeck Park Farm 2000エーカー）を購入している。ここの土地を改良し牧羊に取り組むため、BPはトム・ストーリー（Tom Storey）という腕の良い羊飼いに白羽の矢を立てた。彼は、自分の農場に移って欲しいと交渉するためやってきたBPとの出会いを90才近くになっても明瞭に記憶していた、という。「土曜の夜のことでした、11月のね。ちょうど搾乳を終えたとき、あの方が小屋に入ってみえた、木底靴をはいて、車を外にとめてね。お年の割に、てきぱきされていて、きれいなご婦人で

したね…『私の羊を管理してもらいたいです、現在のあなたの給料がいくらであっても、その二倍は出しますよ』と言われ、私が承知すると『あなたは、おいくつ?』と尋ねられた。『30才ちょうどです』と申し上げると、『あら、私は二倍ね、ちょうど60ですもの』とおっしゃった。こういう次第でトラウトベックに行くことになったんですがね…あの方は、羊のことで何かお願いすると、すぐにきいて下さいましたよ…」²¹。

トラウトベック・パーク農場を購入した際、BPは毎日農場を見て回るために車も買い込んだ。運転は母親付きの運転手がしてくれ、湖をまわるBPの姿が地域の人々には馴染みの光景になっていたと言う。

その3年後の1927年、BPはトム・ストーリーにトラウトベック・パークからヒルトップへ移って農場経営をし、羊を飼育して品評会に出して欲しいと頼んだ。以後BPの農場の羊は各種の賞を獲得していくことになる。その頃を回想してトム・ストーリーはBPについて次のように語っている。「あの方は、当時羊について多くの事をご存じではなかったが、羊が、とりわけハードウィック種の羊が大好きでいらした。二人で一緒によく仕事をしたものですよ。毎朝搾りたての乳を届けてあげて、その日の予定をお話しするんですがね、予定を変えるように言われたことは、殆どありませんでしたよ。最初の年にハードウィック種の羊をホークスヘッドの品評会に出して賞を取ったときなど、それはもう大喜びされましてねえ…」²²

1930年（BP64才）には、4000エーカーを超えるマンク・コニストン料地（Monk Coniston Estate）が売りに出された。そこは湖水地方有数の風光明媚な地域だったため、いずれ開発の波にさらわれることは間違いなかった。ナショナル・トラストが購入費用の全額を集めることは不可能だったが、援助を求められたBPは、全体をまずそっくり買い取り、トラストが集め得た金額分を原価でトラスト側に渡し、残りを自分の所有としておいた。そして当面は土地の管理も自分の分と一緒にに行っていたのである。この1930年は、BPが「ハードウィック種綿羊協会」の初の女性会長に就任した年でもある。

1939年（BP73才）には第二次世界大戦が始まり、その前年位からBPは時々体調をくずし、リヴァプールの病院に入院を繰り返していた。若い頃からリューマチ熱や心臓の不調、後には気管支炎に悩まされたが、何と言っても古い家と庭と農場の仕事が過労をもたらす第一の原因だった。

1943年（BP77才）12月22日の夕方、羊飼いのトム・ストーリーはBPに呼ばれ、最後の頼み事をされる。「もうじき私の一生は終わります。自分が亡くなってからも農場に留まり、夫のために農場の管理をしてもらえないだろうか」という依頼であった²³。トムは同意し、BPはその夜カースル・コテッジで亡くなった。トム・ストーリーはBPの遺灰をソーリー村の前もってBPに頼まれていた場所へ撒き、「場所は秘密に」というBPとの約束も長らく守っていた。けれども、1986年3月、90才で亡くなる少し前、息子のジェフリーにだけ、BPの遺灰を撒いたヒルトップの中のある場所を明かしていた。ところが、そのジェフリーも1988年12月急死してしまい、遺灰の撒かれた場所は永久に謎に包まれたままとってしまった。

BP亡き後のウィリーは、意気消沈し、1945年8月に亡くなるまで呆然としていた、と共に住んでいた人達は伝えている。

BPは亡くなる数年前からすでに遺書を書いており、財産の処理を詳細に指示していた——動産・不動産の扱い方をはじめ、BPの出版物の著作権・印税に関すること、農場での羊の飼育についての指示、管財人がなすべき事、トラウトバックではカワウソとノウサギの狩猟は禁止すべきこと、ナショナル・トラストに贈られる土地、農地、コテッジについての詳細等々。さらには、生前BPと関わりのあった元家庭教師をはじめとする友人達に加えて、BPに雇われBPを支えてきた家政婦や羊飼い兼農場管理人トム・ストーリーや運転手などへもきめ細かな心配りがなされている²⁴。入念で几帳面な遺書からも、湖水地方の景観を守ろうとするBPの確固たる意志が読みとれるのであるが、同じことは自分の遺灰を撒いたヒルトップ農場内の場所を秘密にするようトム・ストーリーに頼んだのを見ても分かるであろう。「あの方は賢いですからね、そ

ういう場所の在処を知ったら、いろんな人達が見にやって来るって、知ってらしたんですよ…」とトム・ストーリーも語っている²⁵。湖水地方のソーリーにも1930年代には電気が来るようになったが、BPは日常の暮らしの中に電気を取り入れることは拒んでいた。長らくカースル・コテッジで家政婦を務めていたMrs. ロジャーソンは、ローソクとオイル・ランプの下で書きものをしていたBPの視力が悪くなり出した時、無理もないと思った、と語っている²⁶。

貧富の差が激しくなる英国経済の過渡期に富裕階級家庭に生まれたBPが、豊かさの恩恵を享受したことは間違いない。しかしながら、BPが富に身を持ち崩すようなことは、決してなかった。それどころか、並はずれた才能を活かし、極めて現実的な判断力と頑なで生真面目ともいえる程の自制心を働かせて、見事に自立した女性の一生を送った、と言えるのではないだろうか。

【参考文献】

- Davies 1986: Hunter Davies and C. Pemberton Pigott, *Beatrix Potter's Lakeland*, Frederick Warne, 1986.
- Linder (E. & L.) 1955: Enid & Leslie Linder, *The Art of Beatrix Potter*, Frederick Warne, 1955.
- Linder 1989: Leslie Linder, *The Journal of Beatrix Potter 1881-1897*, Frederick Warne, 1966; revised edition 1989.
- Linder 1987: Leslie Linder, *A History of the Writings of Beatrix Potter*, Frederick Warne, 1971; revised edition, 1987.
- Potter 1989: *The Complete Tales of Beatrix Potter*, Frederick Warne, 1989.
- Taylor 1986: Judy Taylor, *Beatrix Potter—Artist, Storyteller and Countrywoman*, Frederick Warne, 1986.
- 吉田・塩野 1990: 吉田新一・塩野米松 撮影 中川祐二『ピーターラビットからの手紙』, 求龍堂, 1990.

【註】

- 1 Linder 1989: xii.
- 2 cf. Linder (E.& L.) 1955: これは、BPの水彩画、スケッチ、デッサン、写真などの選

集で、L. リンダーの3つのポター研究の成果の最初のもの。Enid Linder は姉。

- 3 Linder 1989: xviii には 'this mysterious bundle of Papers' とある。
- 4 Linder 1989: xvi-xxii.
- 5 Linder 1989: 364
- 6 Linder 1989: 443 & n. 30.
- 7 Linder 1989: xxiii. ただし L. リンダーは、1897.4.8の協議会議事録に、「ペーパー 2978号」の取り下げ請求が出され、裁可された、とも記している。そして取り下げの理由として、より高度な研究成果を得た上で論文を発表掲載したかったのではないか、現に1897年後半には、胞子の繁殖について、多数のより高度な研究に取りかかっていてもいた、と述べている。
- 8 Linder 1989: 213.
- 9 Linder 1987: 176-7.
- 10 Linder 1989: 411.
- 11 Linder 1989: 57-8.
- 12 Taylor 1986: 17.
- 13 Linder 1989: 306.
- 14 Linder 1989: 154.
- 15 cf. Linder 1987: 4.
- 16 Linder 1987: 96-7.
- 17 Linder 1987: 98.
- 18 Linder 1987: 104.
- 19 cf. Taylor 1986: 143.
- 20 cf. Taylor 1986: 144, 177.
- 21 Taylor 1986: 156.
- 22 Taylor 1986: 163.
- 23 Taylor 1986: 203.
- 24 cf. Taylor 1986: 204-6.
- 25 Davies 1986: 223.
- 26 Taylor 1986: 162.

Summary

The Life of Beatrix Potter: The Way toward Independence

MAGATA Yoko

This paper aims to describe how Beatrix Potter, upper middle-class woman in late Victorian times, became independently-minded in the process of her growth. First of all I introduced Beatrix Potter's secret journal written in code between the ages of 15 and 30 (from 1881 to 1896) and cracked by Leslie Linder in 1958, to make known the background of the early adult life of Beatrix. I also tried to point out that as a young woman Beatrix was eager to do fungus research scientifically and even submitted a Paper to The Linnean Society of London under the title of "On the Germination of the Spores of Agaricineae—Miss Helen B. Potter", which was not read by Beatrix but by a deputy, as ladies were not allowed to attend the Society's Meetings.

Although she experienced not a few rebuffs, she determines to make her "little books" in the mid-thirties and her talent as the artist and storyteller was recognized—eventually she became one of the most famous children's writers of all time.

The purchase of a working farm in Near Sawrey called Hill Top in 1905 provided her with a firm foothold to open a new life and yield independence all the more because she became interested in sheep and enthusiastic about farming.

In middle age she married her solicitor and the Lake District, where she had spent family holidays between the ages of 16 to 25, was to become her permanent home. During more than twenty years of her life, she devoted, as a

country woman, all her time to farming, breeding the Herdwick sheep of the Lakeland fells.

Canon Hardwicke Rawnsley, whom Beatrix first met when she was sixteen-year-old (1882), had a considerable effect upon her. He introduced her to his conviction that the natural beauty of the Lake District should be preserved and later in 1895 he formed with his friends The National Trust for Places of Historic Interest and Natural Beauty. She was faithful to his belief throughout her life and became a benefactor of The National Trust. When she died on 22 December 1943, The National Trust became the main beneficiary.